

4. 座右の銘

「何事も日進月歩」、そして「人みな我が師」

中村修氏の座右の銘は2つある。まずは「何事も日進月歩」である。早稲田大学時代の恩師である北沢先生がよく口にしていた言葉でもある。少しずつ前へ進むことで、いつかは偉業を達成できる。また、伝統を守ることもできる。伝統を守るには日々前へ進む努力が必要であり、変化していかなければならない。

つぎに、「人みな我が師」である。中村氏は、「人間には縁があり、その縁を尊ばなければならない」と父親からよく言われていたが、実際のところ「たくさんの人たちの縁に恵まれて生きてきた」と感謝する。

その縁のなかで中村氏が我が心の師として仰ぐのが、藤高豊氏である。藤高氏は1927年生まれで中村氏より7つ先輩である。中村氏は藤高氏から多くのことを学んだ。「時代の変化は激しい。過去の経験は余り役立たない。今後必要な事は、需要の先取りであり、独創性だ」（繊維情報センター編「繊維情報」1992年8月〔No. 181〕2頁）と、かつて藤高氏が中村氏に話したことがある。博識で柔軟に富んだ思考方法、謙虚で仕事熱心でリーダーシップを兼ね備えた藤高氏から「常に物事を大きく捉えて視野を広くすること」を教わったと、中村氏は昔を偲ぶ。

1990年の東洋紡績今治工場跡地の3万坪の購入の決定には、「四国タオルが今日あるのは、組合員夫々がライバルと一味違ったモノ作りに専念したからだ。易々として仲が良いだけの業界だったら到底今日の四国タオルはなかった。だから我々も何としても21世紀に通用する業界にしなければならない」という思いがあった。また、今治繊維リソースセンター設立の背景には、「80%以上が零細弱小企業である事による過当競争を排し、体質改善と競争力を強化し、世界各地から情報を収集し、漸進な企画を行い、専門化を進め地域

の繊維関係者が集い交じり、展示をする施設を持たねばならない」という考えがあった(繊維情報センター編「繊維情報」1992年8月[No.181]2~3頁)。いずれの選択も、藤高氏をはじめとする先人たちの教えを継承し、考え抜いた結果だった。



今治市東門町にある(株)今治繊維リソースセンター



センター内には歴代の織機が展示されている

5. 若い世代に向けてのメッセージ

先人たちの智恵を継承しつつ、勇気を持って実行すること

中村氏から若い世代へのメッセージは2つある。

1つ目は、「よく遊び、よく学ぶこと」である。柔軟な発想やフットワークの軽さは、思う存分物事にとり組むからこそ鍛えられる。それを言葉に表現すると「よく遊び、よく学ぶこと」である。

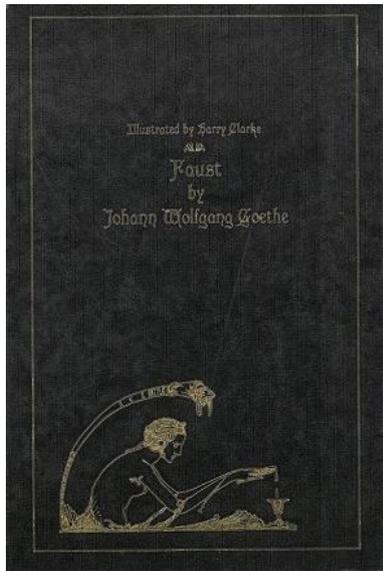
2つ目は、「先人たちの智恵を継承しつつ、勇気を持って実行すること」である。中村氏と同時代に今治タオルの将来を真剣に考えてきた藤高氏から中村氏は多くを学び、それを実行に移してきた。中村氏は、藤高氏が亡くなる前日、家族旅行の帰りに日本そばと菓子を土産に買って藤高氏の自宅を訪問した。その席で藤高氏は、自社の（株）藤高の話や家族の話など、いつもよりまして饒舌にたくさんのお話を中村氏にした。そして、「お前、もっと組合のことを真剣に考えよ。財政的に組合の運営そのものが厳しいから、どっかで戦闘資金を工面して来い。本来なら自分がやる予定やったけど、体調がもうひとつやから、代わりに明日にも東京に行って来い。とにかく頼むから」と中村氏に告げた。さっそく、中村氏は翌日東京に赴き、通産省との折衝に臨んだ。そんな矢先、組合から電話が入った。藤高氏の訃報であった。中村氏は、藤高氏の急逝を知り、不思議な気持ちとともに、昨日の藤高氏の話は自分への遺言だったとおもった。

その遺言のなかに、「産地を永遠に存続させるためには、時代の変化とともに何を守り、何を変えるのかをはっきり区別し、勇気を持って実行せなあかん」という言葉があった。これが、藤高氏から託された中村氏の理事長として任務であり、指針ともなった。

ここで、中村氏の好きなゲーテ  の言葉を引用しよう。

Geld verloren, nichts verloren,
Mut verloren, viel verloren,
Ehre verloren, alles verloren.

財を失うのは小さいことである
名誉を失うことは大きなことである
しかし、勇気を失うことはすべてを失うことである



ゲーテの代表作のひとつである『ファウスト』（荒俣宏訳、新書館、2011年）。

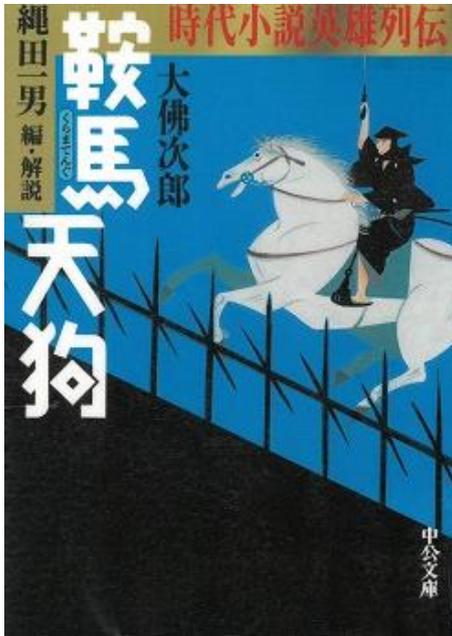
6. お薦めの本

若い頃、中村氏は、^{おさらぎ}大佛次郎  の著書をよく読んだ。大佛は、日本の大衆時代小説の一時代を築いた作家であり、『鞍馬天狗』や『赤穂浪士』、『パリ然ゆ』などで数多くの読者を魅了した。魅了された読者のひとりが中村氏である。大佛は、日本芸術院賞や文化勲章、朝日文化賞など名誉ある賞を次々に受章し、没後の1973年に大佛の業績を称えて朝日新聞社主催で「大佛次郎賞」が創設されたほど、大佛の小説はみなに喜びを与えた。

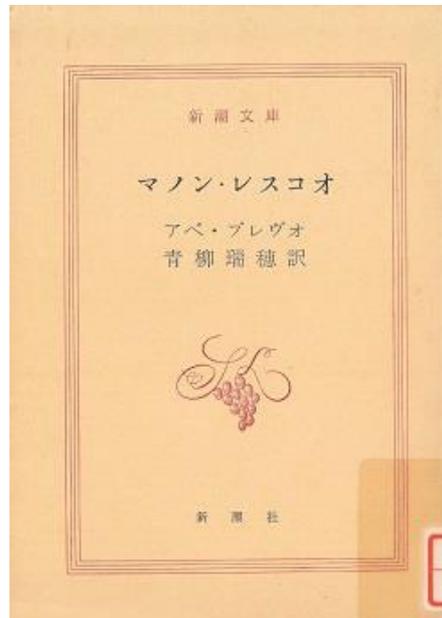
もうひとつ、お薦めの本がある。アベ・プレヴォー  による1731年の長編小説『マノン・レスコー』である。同小説は、18世紀フランス・ロマン主義文学の不朽の名作であり、若き男女の恋

物語である。日本語訳の初版は、『マノン・レスコー』のタイトルで1929年に岩波文庫から出版され、その後1956年に同じタイトルで新潮文庫からも出版された。2社に加え他の出版社からも日本語訳ができるほど、日本において人気を博した。

『マノン・レスコー』は1949年にフランスで映画化され、日本では「情婦マノン」のタイトルで1950年に上映された。中村氏は、3回も映画館で鑑賞し、物語の内容もさることながら、フランス映画の耽美さに強烈な印象を受けた。（完）



大佛次郎『鞍馬天狗』中央公論社、2002年。



アベ・プレヴォ、青柳瑞穂訳

『マノン・レスコー』新潮社、1956年。

（文責・インタビュー： 辻智佐子）

参考文献

佐藤文男 [2010] 講演録「運動家としての心」2010年1月12日、UAゼンセン。

編集後記

都の西北にある早稲田大学での学生時代が「これぞ、青春！」のときだったと語る中村さん。御年、82歳(インタビュー時)とは思えないほど、元気で澆刺とされていました。印象的だったのは、先人たちを敬う謙虚な姿勢でした。青春時代の野球で培われた精悍さと清爽さは今も色褪せていません。

今治タオル工業組合の事務所でおこなったインタビューは、午前10時から始まりましたが、約3時間が経過しようとしたとき、中村さんのなかで「試合開始」のサイレンが鳴りました。その日の午後1時から早慶戦が始まるのです。今も欠かさず年に一回は神宮球場に足を運び、早慶戦を観戦している中村さん。野球と早稲田にかける情熱は今も健在であり、元気の源になっています。「♪♪ みやこのせいほく、わせだのもりに・・・♪」と中村さんが早稲田の後輩たちと神宮球場で合唱する姿が目につかびます。ちなみに、2016年東京六大学野球秋季リーグ戦における早慶戦の結果は、10月29日(土)早大1ー慶大3、30日(日)慶大1ー早大2、10月31日(月)早大0ー慶大1でした。中村さんの声援、一步届かずでした。

お忙しいなか、長時間のインタビュー、ありがとうございました。

(辻)

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の19人目は、ミナトタオル代表の吉田琢磨氏である。ミナトタオルは、地元の(有)村秀鉄工所製のシャトル織機12台のみを工場に設置し、革新織機が主流を占める現在でも職人的技術を必要とする織り方でタオルをつくりつづけている。「この時代、なにゆえシャトル織機にこだわるのか」「そのこだわりはどこから来るのか」などについて、吉田氏のタオル人生とともに語っていただく。

